

## 漱石誕生～幼年時代

漱石は晩年の作品「硝子戸の中」で語っている。

私は両親の晩年になって出来た所謂末っ子である。私を生んだ時、母はこんな年齢をして懐妊するのは面目ないと言ったという話が、今でも折々は繰り返されている。

単に其為ばかりでもあるまいが、私の両親は私が生まれ落ちると間もなく、私を里に遣ってしまった。その里というのは、無論私の記憶に残っている筈はないけれども、成人の後聞いて見ると、何でも古道具の売買を渡世にしていた貧しい夫婦ものであったらしい。私は其古道具屋の我楽多と一所に、小さい筈の中に入れて、毎晩四谷の大道りの夜店に曝されていたのである。それを或晩私の姉が何かの序に其所を通り掛った時見付けて、可哀想と思ったのだろう、懐へ入れて宅へ連れて来たが、私は其夜どうしても寝付かずに、とうとう一晩中泣き続けに泣いたとかいうので、姉は大いに父から叱られたそうである。

私は何時頃其里から取り戻されたか知らない。然しぢき又ある家へ養子に遣られた。それは 私の四つの歳であったように思う。私は物心のつく八九歳迄其所で成長したが、やがて養家に妙なごたごたが起つたため、再び実家へ戻る様な仕儀となった。（「硝子戸の中」二九）

この文に続く、「実家に帰って嬉しい気持ちになったこと」（二九）

「下女が両親であることをこっそりおしえてくれたこと」（二九）

「実母ちえの思い出」（三十）は、浅草時代の六、七歳ごろの幼年期と思われる。

漱石は、「硝子戸の中」で「ある家へ養子に遣られた」と書いているが、ある家とは塩原昌之助の家をさしている。金之助が塩原昌之助のもとに養子に出された時期を明治元年十一月ごろで満二歳になっていなかった。（通説）

（通説）

「漱石の思い出」（夏目鏡子述、松岡譲筆録）

小宮豊隆「夏目漱石」

鷹見安二郎「漱石の養父——塩原昌之助」

石川悌二「夏目漱石——実像と虚像」

これまでの漱石の幼年時代、すなわち金之助の養子時代については、いくつかの実証的な研究がある。その中で「道草」に書かれている内藤新宿と浅草時代の漱石（塩原金之助）について検証してみる。

彼は自分の生命を両断しようとした。すると綺麗に切り棄てられるべき筈の過去が、却って自分を追掛けて来た。彼の眼は行く手を望んだ。然し彼の足は後へ歩きがちであつ

た。

そうして其行き詰まりには、大きな四角な家が建っていた。家には幅の広い梯子段のついた二階であった。其二階の上も下も、健三の眼には同じように見えた。廊下で囲まれた中庭もまた真四角であった。

不思議な事に、其広い宅には人が誰も住んでいなかった。それを淋しいとも思わずにいられる程の幼い彼には、まだ家というものの経験と理解が欠けていた。

彼は幾つとなく続いている部屋だの、遠く迄真直に見える廊下だのを、恰も天井の付いた町のように考えた。そうして人の通らない往来を一人で歩く気でそこいら中駆け回った。

彼は時々表二階へ上って、細い格子の間から下を見下ろした。鈴を鳴らしたり、腹掛けを掛けたりした馬が何匹も続いて彼の眼の前を過ぎた。路を隔てた真向かいには大きな唐金の仏様があった。其仏様は、胡座をかいて蓮台の上に座っていた。太い錫杖を担いでいた。それから頭に笠を被っていた。

健三は時々薄暗い土間に下りて、其所からすぐ向側の石段を下りるために、馬の通る往来を横切った。彼は斯してよく仏様へ攀じ登った。着物の褌へ足を掛けたり、錫杖の柄へ捉まったりして、後ろから肩に手が届くか、又は笠に自分の顔が触れると、其先はもう何する事も出来ずにまた下りて来た。「道草」 三八)

漱石の誕生地は、牛込馬場下横町（現：新宿喜久井町一番地）

漱石が養父母とともに居住した内藤新宿北町一六番地（江戸時代は四谷太宗寺門前、現在は新宿区新宿二丁目内）

浅草諏訪町四番地（現在は台東区駒形一丁目内）

金之助が浅草寿町一〇番地（現：台東区浅草町二丁目二番地）に養父母とともに住んでいた。（居住、動静は、既に確認されている）

金之助一家、浅草三間町へ

鷹見安二郎説

明治一一年発行の「東京地主案内」の「寿町十、五十六坪、塩原金之助」（現：台東区浅草寿町二丁目一二番）という記録から四一番組事務所（寿町一番地）の隣地を昌之助の添年寄時代の住居とした。

もう一つは、石川悌二説

現在の雷門一・二丁目、寿四丁目に該当する三間町としている。

「四谷太宗寺門前より区内浅草三間町え転居仕候 四十一番組添年寄 塩原昌之助」願書の転居先が三間町になっている。明治二年三月、町家への饗応謹慎に対し、同年一〇月、件の願書を提出した。

三間町の家番地は不明だが、三間町は田原町から東方駒形町へ行く陸羽街道の途中南

側に位置した細長い町で、現在は台東区寿町四丁目の一部になっているとした。

明治四年六月 酒宴による増収賄により免職、浅草から内藤新宿に戻り、伊豆橋の管理人として一年ほどぶらぶらした。「道草」(三八)の「大きな四角な家」が金之助に鮮明な記憶として残った。

明治五年七月、第三第区第一四小区の戸長に任ぜられ、管理区域の赤坂に通う。その後、第五大区第五小区の戸長を経て、明治六年三月、金之助を連れて浅草諏訪町に移った。漱石の「道草」(三九)から健三の回想引用

それから舞台が急に変わった。淋しい田舎が突然彼の記憶から消えた。

すると表に連子窓の付いた小さな宅が朧気げに彼の前にあらわれた。門のない其宅は裏通りらしい町の中にあつた。町は細長かつた。そうして右にも左にも折れ曲がつていた。

彼の記憶がぼんやりしているように、彼の家も終始薄暗かつた。彼は日光と其家とを連想する事が出来なかつた。

彼は其所で疱瘡をした。大きくなって聞くと、種痘が元で、本疱瘡を誘い出したのだとかいう話であつた。彼は暗い連子のうちで転げ廻つた。惣身の肉を所嫌わず搔きむしつて泣き叫んだ。

彼はまた偶然広い建物の中に自分を見出した。区切られている様で続いている仕切の打つには人がちらほら居た。あいた場所の畳だか薄縁だかが、黄色く光つて、あたりを伽藍堂の如く淋しく見せた。彼は高い所にいた。其所で弁当を食つた。そうして油揚げの胴を干瓢で結へた稲荷鮓の格好に似たものの上から下に落とした。彼は勾欄につらまつて何度も覗いて見た。然し誰もそれを取つて呉れるものはなかつた。伴の大人はみんな正面に気を取られていた。正面ではぐらぐらと柱が揺れて大きな宅が潰れた。するとその揺れた屋根の間から、髭を生やした軍人が威張つて出て来た。——其頃の健三はまだ芝居というものの観念を有つていなかつたのである。

彼の頭には此の芝居と外れ鷹とが何の意味なしに結び付けられていた。突然鷹が向うにみえ、青い竹藪の方へ筋違に飛んで行つた時、誰だか彼の傍にいるものが「外れた、外れた」と叫んだ。すると誰だかまた手を叩いて其鷹を呼び返そうとした。——健三の記憶は此処でぷつりと切れていた。芝居と鷹と何方を先に見たのか、夫さえ彼には不分明であつた。したがつて 彼が田圃や藪ばかり見える田舎に住んでいたのと、狭苦しい町内の往来に向いた薄暗い宅に住んでいたのと、何方が先になるのか、それも彼にはよく判明らなかつた。そうして其時代の彼の記憶には、殆ど人というものの影が働いていなかつた。

然し島田夫婦が彼の父母として明瞭に彼の意識に上つたのは、それから間もない後の事であつた。

其時夫婦は変な宅にいた。門口から右に折れると、他の塀際伝いに石段を三つ程上らねばならなかつた。そこからは幅三尺ばかりの露路で、抜けると広くて賑やかな通りへ出た。左は廊下ウエ御曲がつて、今度は反対に二三段下りる順になつていた。すると其所に長方

形の広間があった。広間に沿うた土間も長方形であった。土間から表へでると、大きな河が見えた。其上を白帆を懸けた船が何艘となく往ったり来たりした。河岸には柵を結った中へ薪が一杯積んであった。柵と柵の間にある空地は、だらだら下りに水際迄続いた。石垣の隙間からは弁慶蟹がよく窺を出した。

島田の家は此細長い屋敷を三つに区切ったものの真中にあった。基は大きな町人の所有で、河岸に面した長方形の広間が其店になっていたらしく思われるけれども、その持ち主の何者であったか、またどうして彼が其所を立ち退いたものか、それらは凡て健三の知識の外に横たわる秘密であった。

